

必死に抵抗するがそれも空しく、左右に掛かる力に膝はあっさりと割り開かれてしまった。

「ほう……」

「っ!!」

多分、男の目には今まで縮こまっていたのが嘘のようにグンと膨張した。ペニスが映っているのだろう。

羞恥に太腿が戦慄くのを感しながら、無意味だと分かっている男から顔を背ける。

「罰を与えているのにココをこんなに……本当に悪い子だな。学校はサボってばかりなのにこんなところだけしっかり一人前に……ああ、まだ半人前だったか」

男がクク、と喉の奥で笑う。

反応してしまったこととそれを見られていること、そしてピンク色の先端を僅かに覗かせているだけのペニスを『半人前』と嘲笑われた恥ずかしさに頬が熱くなるのを感じていると、男はとんでもないことを言い出した。

「そうだ、オレがアンタのソコを一人前にしてやろう」

「なっ……何言って……」

『大人』になれば少しは自分の立場を自覚して、

勉強にも励むようになるかと思ってな」

「何だよそれ！ 訳分か……っ!？」

身体の一部が大人になることと真面目に勉強に励むようになることに一体何の関連性があるのだと、そう口にしよとしたところでペニスをやんわり握られ、驚きのあまり言葉が出なくなる。

「ちよ……マジで、止め……あん……アはっ」

何とか言葉を絞り出そうとするも、ペニスを優しく包み、ゆっくりと上下に扱く男の手によって全て喘ぎに変えられてしまう。

「やあ……んあ……ふ、うあっ……」

男の手が上下の動きを繰り返しているうちに、嬌声に混じってにちゅにちゅと湿った音が辺りに響いてきた。耳を塞ぎたかったが叶わず、どうにも出来ずにいる間にも先走りが潤滑剤となってより強い快楽をもたらし、抵抗する気力をどんどん削いでいく。

あと少しで意識の全てが快感に飲み込まれるという時、男の指がすっかり濡れた先端に巻きついてきた。

ゴツゴツした指が先端だけをじっくり撫で擦り、少しずつ包皮を引き下げていく。